

メルボルンでの 第二十四回OME P世界大会に参加して

上垣内 伸子

二〇〇四年七月二十一日から二十四日まで、オーストラリア、ビクトリア州メルボルンで、第二十四回OME P世界大会が開催されました。日本からの参加者はOME P会員を中心に約三〇名。メルボルンの美しい歴史的街並と雄大な自然とオージースマイルに囲まれてすごした四日間でした。One World: Many Childhoods「一つの世界、多くの子ども時代」という大会のテーマに象徴さ

れた、地域のそして個人の固有性の尊重を基盤にした相互理解と協力という保育の課題と、国情の違いを超えた共通性を、参加者との語らいの中で実感として受けとめることができた大会でした。

今大会の目指すところは、世界水準という発想からの転換であり、固有性の尊重でしたが、そこでのキーワードは、多様性と対等性でした。世界規模で地域間格差お

よび地域内格差の拡大が見られる今日にあつては、まずはその差異の存在を確認し合うことから始める必要があります。今大会では、オセアニア、アジア、アフリカ、中南米を中心とした先住民民族、移民、難民、親の疾病などの要因から困難な状況で育つ子どもの状況が報告され、当事者による直接の語りであった故、誰もが心動かされ深く聞き入っていました。グローバルスタンダードという名を借りた均等化ではなく、個々の特性や歴史性を尊重し、それぞれが異なる状態のまま存在することを認めることや、あいまいさを内包したまま踏みとどまり持ちこたえつつ、自分と相手の幸福を求め続ける精神力を持つことが要求されているのだと感じました。多様性を容認することが出来ない非寛容さは戦争へとつながるものかもしれません。それ故に、多様性を認めるとは、平和を希求することと同義話であり、保育の場において多様性を認めるとは、保育室から平和教育を始めることなのだと思われました。



▲Aborigines Yappera Children's Service 4-5歳クラスのアボリジニのスペース
ス (榎田二三子 O M E P 会員撮影)

固有性・多様性を認め合った上での協働とパートナーシップの成立のためには、お互いが対等であることが重要なでしょう。大会では、子どもと保育者、子どもと親、子ども同士、保育者同士、保育者と親、どの関係をとっても、「誰かにしてもらおう、やっつてあげる」という従来の位相からの変化が生じていることが、多数報告されています。このような多様性と対等性が尊重されている状況において、相互にとつて意味ある exchange 交換が成立するのではないのでしょうか。それは、アイデア、知識、経験の交換であり、そのためには、実際に相手の居場所を訪問しあうという、言葉だけではない身体性を持った交流が不可欠。私にとつては、まさにこの OMEP 世界大会での出会いと交流体験が、意味ある交換の場であったのだと感じました。

教育施設見学として訪れた幼稚園などでも、固有文化を尊重した保育と環境設定がなされていました。私が参加したメルボルン王立植物園の子どものための体験学習

プログラムは、アボリジニの女性フェイさんによるアボリジニの地に客人が足を踏み入れるときの儀式から始まりました。オーストラリア固有文化のルーツは先住民のアボリジニであり、オーストラリアの自然にせよ芸術にせよ何について学ぶにもまずここからスタートするのだという、民族固有の文化を尊重するという姿勢が一貫して流れていた大会であり、こうしたオーストラリアの歴史・社会背景が、今大会のテーマをリアリティのあるものにしていったような気がしました。

今回私に同行し、ワラビー、エミュー、カモノハシなど念願のオーストラリア固有の生き物と触れあいご満悦の十歳になる娘は、開会式と閉会式で子どもたちが手話を交えて歌った「We are one, but we are many. We are Australian.」という「オーストラリア讃歌」の歌詞を今も時々口ずさんでいます。彼女にとつても、多様性と固有性、exchangeを肌で感じた旅行となったようです。

(十文字学園女子大学・OMEP日本委員(会会員))